

学校だより

12月号

やさしい子 たくましい子 考える子



黒門

発行日 令和7年11月29日
発行者 台東区立黒門小学校
校長 飯塚 雅之

見える工夫、伝わる思い

校長 飯塚 雅之

早いもので、2025年も最後の月となりました。12月は、黒門小学校創立115周年を祝う記念式典を予定しています。これまで積み重ねられてきた歴史を振り返るとともに、次の世代へ責任をもってつないでいく決意を新たに、一年の締めくくりを迎えたいと思います。

さて、11月には東京デフリンピックが開催され、世界各国から多くのデフアスリートが集まりました。

デフリンピックは、1924年のパリ大会に始まり、今年で100周年を迎え、今回、日本で初めて開催されたこの大会は、多くの方の注目を集めました。競技では、スタートの合図を光で知らせたり、審判の指示を旗やジェスチャーで伝えたりするなど、「見て分かる」工夫が随所に見られました。

どの競技にも共通していたのは、選手たちが自分の力を最大限に発揮しようとする真剣な眼差しです。世界の舞台で競技する姿は、大きな感動を与えてくれました。

一方で、競技そのもののだけでなく、私たちに様々な気付きを与えてくれた大会でもあったように感じます。

デフリンピック開催中、会場では「聞こえない人」「聞こえにくい人」が安心して過ごせるよう、様々な工夫が見られたことが報じられていました。例えば、音を使ったアナウンスの代わりに、掲示やホワイトボードで情報を伝える場面が多く見られました。また、「聴覚障害＝手話」と単純に捉えず、口の動きから理解する人、後天的に聞こえにくくなったため手話だけの会話に困難さを感じる人など、聞こえ方にも多様性があることを伝えていました。

ボランティアもたくさん活躍していましたが、中には、善意からつい声で話しかけてしまう人や聞こえる前提でふるまってしまう人もいたそうです。こうした無意識の行動が、聞こえない人に「何度も自分から『聞こえません』と伝える負担」を生んでいることに触れ、「どちらかが合わせるのではなく、互いに理解し合える方法を増やしていくことが大切だ」と伝えていました。

また、デフアスリートとの交流から、自分のことを知ってもらおうと自身が通う小学校の全クラスに話をした小学生も紹介されていました。人工内耳や補聴器をつけていたため、周りから「触られる」「じっと見られる」などの違和感を覚え、つらい思いをしたことがあったと言います。けれども彼は、「大切なものだから触らないでほしい」と自分の言葉で伝えることで、周囲の理解が広がっていったそうです。違いがある子供同士が自然に共に育つことの難しさにも触れつつ、「互いを知り、話すこと」が安心した関係をつくる第一歩だと伝えていました。

本校には「きこえとことばの教室」があり、台東区内から多くの子供たちが学びに来ています。教室の先生方が校内の子供たちに難聴や言語障害についての理解啓発授業を行っていることは、本校ならではの貴重な学びの機会となっています。

学校で過ごす子供たちの日常にも、多くの気付きのチャンスがあります。友達の気持ちを想像すること、伝え方を工夫すること、分からないことをそのままにせず、理解しようと一歩踏み出してみること。こうした行動の積み重ねこそが、共生社会をつくる土台になります。「違い」は壁ではなく、新しい視点に出会う扉です。このデフリンピックが示してくれた姿を、学校でも大切にしていきたいと思います。